

2011 年原水爆禁止世界大会に参加して（下）

原水爆禁止世界大会

核廃絶は単なる空想ではなく 現実的な軍縮への道である

今年の世界大会の大きな特徴の第一は、昨年のNPT再検討会議の成果を受け核兵器廃絶へ向け国連が指導的な役割をよりいっそう発揮して、諸国民の運動と連帯してその流れをおしすすめていこうという決意が感じられる大会だったことです。昨年パン・ギムン事務総長が広島・長崎を訪れ核廃絶の決意を明確に表明しました。NPT 再検討会議で核保有国の様々な妨害を受けながらも期日を設け具体的な核兵器廃絶への行動を核保有国に義務付ける方向で運動が進む中で今年の世界大会でした。パン・ギムン事務総長は福島を訪問中ということで、代理のドゥアルテさんが開会総会で挨拶に立ちました。核保有国が核による安全保障を主張するのは国連憲章に反することであり、核が存在する限り使用の危険に人類は脅かされ、また核開発により国際的な地位を高めたいと思う国々を生み出すことになる。核の完全廃絶こそ不安を取り除く唯一の道であると発言しました。また核廃絶が単なる空想ではなく現実的な軍縮への道であり、多くの加盟国はそれを支持しており、国連は核軍縮を最優先の課題として取り組むことを決意表明しました。そのためには核兵器のことを人々が正しく理解することが重要で、国連は被爆者体験を各国の言葉に翻訳し世界の人々に伝えていくための取り組みを準備していることを紹介しました。

今年の二つ目の大きな特徴は、東日本大震災・福島原発事故を受けておこなわれた大会ということです。二度と被爆者を出さないことを目標に取り組んできた中で、原子力発電所の危険性はこれまでも危惧されてきたことではあったが、政府も電力会社も安全神話を振りまき、その危険性を意図的に無視し続けてきたことに対する批判が述べられていました。

運動は確実に青年に、未来に受け継がれて いる。

三つ目には、原水爆禁止世界大会の参加者は今年7800人のうち半数以上が青年の参加となり、運動が確実に未来に受け継がれてきたということです。海外からも青年の参加を積極的におこなっています。今年、韓国から20名以上の高校生が参加し、全国高校生交

流集会で日本の高校生とも交流しました。日本の高校生から「日本が朝鮮に行ってきたことについて、日本を恨む気持ちはないのか」という質問をしました。韓国の高校生は「日本の原水禁運動は8月6日・9日から始まるが、韓国の被爆者の運動は日本が朝鮮を併合したときから始まる。なぜ韓国人が広島や長崎で被爆することになったのか、そのことを私達は学んでいる」と発言していました。フランスの代表の方が「フランスとドイツは過去の歴史の中で何度も戦争を行ってきた。しかし今、過去の歴史も含め様々な文化的な交流をおこないお互いに理解しあう努力をおこなってきた結果、現在ではこの二つの国が憎しみあい戦争を起こすことは考えられなくなっている」と発言し、若者たちの交流と相互の理解を大切にすることが平和を築くことになるアドバイスしました。参加した日本の高校生にとって平和について様々な視点から考える機会を与えてくれる集会となりました。

高校生の成長や変化に教員として大切なことを教えられた

高校生のツアーでは原爆資料館の見学は必ず行きます。長崎では、さらに「岡まさはる」記念資料館という小さな資料館を見学しました。長崎の市会議員だった人が個人的に日本の戦争の加害責任の資料を集めたものを展示しています。韓国の高校生と交流した後、この資料館を訪れた生徒は、本当に真剣に学び原爆の被害とともに日本が戦争でやってきたことについて深く学び考えるきっかけとなったように思います。

青年の先生も一緒に参加しましょう

毎年、大阪の高校生のツアーで原水禁大会に参加するのは非常にハードでそろそろ体力的にもついていけないような気になっています。けれど、今年も大学生や社会人になって参加したたこぴーのOBに再会し、大いに励まされました。また、連れて行った高校生の成長や変化には教員として大切なことを教えられたし、エネルギーをもらいました。今年は長崎で8日の夜に教員の集いがあり、そこで原水禁世界大会に高校生を連れて行く楽しさについて報告させていただきました。来年は全国から多くの教員が子どもたちと世界大会と一緒に参加することを呼びかけました。来年の世界大会もたこぴーツアーで参加しようと思っています。大阪の私学の先生、特に青年の先生がた、ぜひ一緒に参加しましょう。